

## 審査結果の要旨

論文題目：

Representation and Contextualization of Japanese Architecture in Western Architectural Periodicals

(西欧メディアにおける日本建築の表現と文脈化)

氏名： ニコロヴスキ ニコラ

本論文は、戦後の日本建築が、西欧のメディアでどのように扱われ、表現されてきたかを時代ごとに分析し、世界における戦後の日本建築の位置付けを明らかにしようとしたものである。

戦後の日本建築は、その概念や知識及び技術について西欧から大きな影響を受けたが、同時にメディアを通じて西欧にも影響を与えてきたと言える。時代によってその受け取られ方が異なり、日本建築を世界の文脈で論ずるに当たって重要なテーマではあるものの、海外の建築メディアを対象に日本の近代建築の表現と、扱われ方を研究したものはあまり見当たらない。本論文は、1955年～2005年を対象に、西欧メディアにおいて日本建築がどのように扱われてきたか、複数の建築メディアを比較分析することで、その変遷を明らかにし、西欧との関係性に着目した独自の視点による日本建築論を構築しようとしている。

本論文は7つの章から成り立つ。第1章では研究背景、研究の目的及び研究方法を述べている。また第2章では類似の既往研究を概観しながら、本論文の持つ独自性及び意義を明らかにした。

第3章～第5章では、調査対象として選定したイギリスの *Architectural Design* 誌、イタリアの *Casabella* 誌、フランスの *L'Architecture d' Aujourd' hui* 誌の3誌についての分析を行った。まず第3章では調査対象とした1955年～2005年を概観し、20世紀の日本建築の海外での受容についての変遷について論じている。

第4章ではレイトモダニズム期である1955年～1970年を取り上げ、調査対象3誌を詳細に分析している。1960年代に海外で紹介されはじめた日本建築は、西欧のモダニズムを日本が受容したものの展開でしかなかった。誌上では、日本的な特徴に着目されることはあっても、取り上げられていたのはあくまでモダニズム建築であり、日本的な建築にはほとんど注目が

集まっていなかったことを指摘した。

第5章では、1978年～2005年を取り上げ、その扱われ方の変容について論じている。磯崎新による国際的な活動によって、展覧会などが行われ、建築の新しい概念が流布される始めた結果、日本建築の海外での取り上げられ方にも変化が見られるようになる。特にポストモダニズム期である1980年代は日本の建築が多く取り上げられ、議論も活発であったが、日本のバブル期を頂点とし、その後は掲載頻度こそ持続したものの日本建築を対象とした新しい議論は起こっていないことなどを明らかにしている。

第6章では、該当3雑誌に取り上げられた5人の日本で活躍した建築家（磯崎新、槇文彦、長谷川逸子、藤井博巳、トム・ヘネガン）及び日本建築の研究者（ボトンド・ボグナー）を対象に独自に行ったインタビューを収録しており、特に磯崎新が果たした役割の重要性などについて本人へのインタビューを通じて論じている。

第7章は結論として、改めて日本建築の受容の変化を論じ、1970年代に大きな転換があったことを指摘している。

本論文が、これまで定量的に行われたこのない海外建築メディアでの日本建築について分析を行い、その扱われ方が時代とともに変遷する中での転換点やその原因を明らかにしたことは、日本建築の持つ日本的なるものがいかに生み出され発見されてきたかという普遍的なテーマの一端を明らかにしている点で大きな価値があり、建築学の意匠分野の研究に大きな寄与をなしたものと判断できる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。